意見交換参加者からは，推進会議での共有について承諾を得ています。
中村准教授からは，本速報の推進会議での共有について承諾を得ています。

資料１

避難行動等に関する住民意見交換会（速報）

令和５年２月１４日実施

青森中央学院大学　中村智行准教授
（同行･協力：中村川流域治水緊急対策推進会議　事務局）

意見交換会の趣旨

令和４年８月豪雨における人的被害はゼロ

① 流域治水
② ８月９日当日の状況
③ 避難行動
④ 避難のきっかけ
⑤ 活用した情報取得ツール
⑥ その他意見
⑦ まとめ

意見交換経緯・参加者

（経緯）

- 中村准教授を含む県内の防災に関する研究を行っている弘前大ほかと推進会議事務局の情報共有
- 中村准教授から鰺ヶ沢町を通して打診
- ２月にアンケート用紙を町内へ配布し、３月末までに回収して分析する予定

（参加者）

① ２０～７０代・男性・７名
（当日欠席の女性１名除く）

② 町内会，農家，病院，社会福祉協議会，商工会，青年会，保育所，小学校

中村准教授

１．流域治水

① 参加者で知っている方はいない。

② 推進会議の取組についてもいない。

・公（おおやけ）が何をしているか伝わっていない。

・流域治水の趣旨も踏まえ、丁寧に伝えていく必要がある。

２．８月９日当日の状況

① ８：３０には市街地上流の水田は浸水（この時点では市街地の浸水はない）

② １０：５０避難指示発令

③ １１：００くらいから徐々に市街地の浸水が始まる。住民はまだ大丈夫という認識

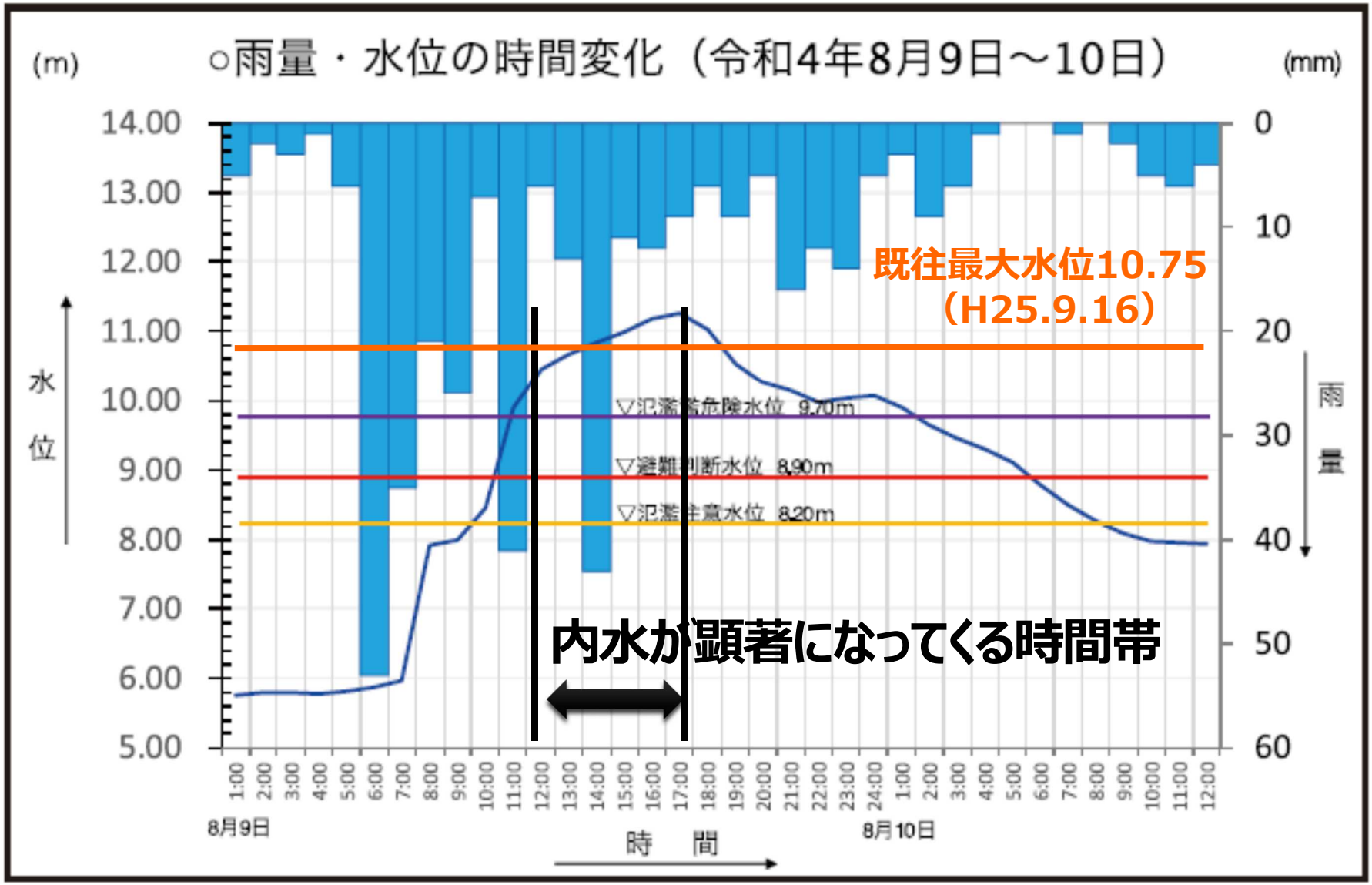
④ １４：００くらいには車の通行が困難な内水氾濫が一部で発生

⑤ １６：００くらいには避難がほぼできない状態の内水氾濫（一部外水含む）

・お昼前後から内水氾濫が顕著な状態

・４時間後の16時頃には避難がほぼ出来ない状態

中村上流観測所の詳細データ



３．避難行動

① １０：５０発令の避難指示で実際に避難をしたのはルール化していた保育所のみ

② 町内会，社協は避難の呼びかけ実施

③「避難情報」ではなく「身近な異変」で避難行動を開始　※避難行動の実態については調査中

・避難指示の発令で行動を起こしたのは保育所のみ
・避難指示をきっかけに避難の呼びかけ行動の実施
（避難をした人がいたかまでは把握できていない）

４．避難のきっかけ

① 避難指示の発令
② 川からではなく違う方向から水が来た。
③ 消防団・本部メールが５分おきに届く
④ 近くの水路（いつもは足首くらいの水位）から水が溢れ出した。
⑤ 冠水がひどくなってきた。
⑥ 水位情報を見ての判断が若干名（避難はしていない）
⑦ 川の状況はみていたが，内水への着目は皆無

避難指示等の行政が発信する情報より「自分の目で見る事実」や「観測情報」を信頼している傾向

５．活用した情報取得ツール

① テレビ
② スマホのSNS
③ 消防団・本部メール
④ 防災行政無線

・大多数は、テレビ
・若い世代はスマホでSNS（ライン、ツイッターなど）

６．その他意見

① 人命の次に大事なのが車の保全
② 避難所など車だけを守るために置く人もいた（混雑）。
③ 保育所、病院では入居者を急遽ピストン輸送（複数往復の実施）での避難対応
④ 水田浸水の影響は浸水継続時間による。泥，木がなく水だけであれば収穫への影響は少ないと考えられる。
⑤ 情報取得ツールはテレビやネットが大半
⑥ SNS，消防団メールが公的機関の情報より優先
⑦ 被災して、はじめてハザードマップを見た。
⑧ モノの避難を考えている（何を、どこまでの高さに保管するか）。

・「車」自体の避難は地域特性に応じて検討が必要
・防災行政無線の活用は今後の課題

７．まとめ（速報）

① 当日朝には上流の水田で氾濫発生
② お昼～１６時までに内水氾濫が顕著
③ 避難指示で避難行動に移す人はほぼいない。
④ 「避難情報」ではなく「身近な異変」で避難行動を開始
⑤ 情報取得ツールはテレビとスマホ
⑥ 人命の次に「車」の保全
⑦ 公の取組は、現時点で認知度が低い可能性がある。

事実として捉え、次に向けて考えるべきこと。

・事前防災の意義（理想ではなく、効果を検証）
・信頼度合い　自分の「目や調べたコト」　＞　公的機関情報
・自分ごととして捉えられる情報内容や提供の仕方。